



小樽の歴史文化の発掘と地域活性化（後編）

～梁川商店街活性化プロジェクトから考える～

小樽商科大学ビジネス創造センター学術研究員

高野 宏 康

1. 梁川商店街とは

小樽の歴史文化を活かした地域活性化の取り組みとして、今回は梁川商店街活性化委員会の活動を紹介したい。梁川商店街は、JR小樽駅から中央通りを下って運河に向かう途中、北側（左側）に龍宮通りまで続く商店街である。約30店舗が軒を連ね、昭和のたたずまいが感じられる古き良き商店街といわれる。「梁川」とは、明治期初頭からこの一帯の土地を所有していた榎本武揚の雅号にちなんで名付けられた由緒ある名称である。古くから商店だけでなく映画館や旅館なども多数あり、歴史ある小樽屈指の繁華街として賑わっていたが、昭和40年頃から賑わいに翳りがみられはじめ、近年はその活性化が課題となっている。

2. 梁川商店街活性化委員会の活動

そんな中、2014年2月、若手店主たちが中心になって「梁川商店街活性化委員会」を立ち上げた。同会は商店街組合の店主のほか小樽商大の教員・研究員なども加わった約20名程度の集まりで、商店街ガイドブック作成などを目的に地域商店街活性化事業「にぎわい補助金」を申請するなど、現在まで様々な活動を展開している。同年9月の小樽中央市場「顔顔市」では市場内で写真展（昔の商店街写真、市場にゆかりのある竹鶴リタ写真展）を開催。翌年2月の「雪あかりの路」では商店街オリジナルのキャンドルホルダーで各店頭を照らし、大型のオブジェを製作した。

事業の柱となる梁川商店街の公式ガイドブック『小樽梁川通り』（2015年2月発行）は、編集会議でアイデアを出し合い、梁川商店街の特徴である「歴史」を深く掘さげ、飲食店や老舗、新しい店舗など多種多様なお店があつまる梁川商店街とその界限を詳細に紹介するディープな内容となり、長く読み継がれる価値のある内容に仕上がった。このガイドブックは現在も店主たちが手分けして各地に配布を続けている。同年6月には商店街として初となる龍宮神社例大祭で小樽商大の江頭ゼミと共同出店し、補助金頼みにならない収益事業を試みた。

3. 藤森茂男を通じた商店街活性化事業

梁川商店街には「運河画廊」と名付けられた藤森茂男（1936-87）の画廊がある。藤森茂男は看板や包装紙のデザインなどを手がける商業デザイナーで、

潮まつりの立ち上げの中心人物の一人、「小樽運河を守る会」の初代事務局長として保存運動に取り組んだことで知られる人物である。藤森は仕事の合間に埋め立てられる前の運河の絵画を多数描いており、市立小樽美術館の企画展「小樽運河・いまむかし」（2015年4月25日～7月5日）で、初めてまとまったかたちで展示された。

梁川商店街では「運河画廊」とのゆかりから美術館とのコラボ企画を開催した。藤森茂男の多様な作品と活動、人柄を紹介する展示会「デジナーレの精神～藤森茂男の実像」を中央市場第3棟で開催した。また、藤森の故郷・小樽への想いが込められた言葉を「藤森茂男20のメッセージ」として商店街の街頭に掲げた。昔の商店街写真のオリジナルポストカード作成し、美術館特別展の入場券半券とガイドブックを持参し協賛店で買い物をした人にプレゼントする企画も実施した。

5月には公式ガイドブック作成者による梁川通り歴史セミナーを開催。6月には美術館展示見学と梁川界限を散策するガイドツアーを実施し、約35名が参加した。美術館では学芸員の解説、散策では「おたる案内人」のガイド、梁川通りの飲食店で昼食をとり、「運河画廊」で関係者のお話をうかがう。商店街理事の案内で各店主のお話を聞きながら商店街をめぐり、中央市場では組合総務のお話、藤森茂男展では担当者の解説を聞く。最後は梁川界限の聖地・龍宮神社で宮司のお話を聞き、参加者には店舗クーポン等のお土産が配付された。「歩いて」「見て」「聞いて」「食べる」、梁川商店街とその界限、そして藤森茂男の魅力を満喫する希有なガイドツアーとなった。

4. 歴史文化を活かした地域活性化

これまで梁川商店街は、中央通りを下って南側（右側）の都通りやサンモール、花園銀座に対して、ともすれば活性化の契機がなかなか見出しにくいと言われがちであった。筆者の観点からは、若手店主たちが梁川の特徴である歴史文化を再発見し、積極的に活用していったことが商店街活性化の契機となったと思われる。このことは小樽全体に対しても当てはまるのではないだろうか。「観光都市」小樽のアイデンティティにその奥深い歴史文化を位置づけ、積極的に発信していくことが小樽の未来を切り開くキー・ポイントになると思われるのである。